

タレントの見栄晴さんが闘う咽頭がん

リスク高める酒と喫煙 発声温存へ増えた治療法

今年初めにタレントの見栄晴さんがステージ 4 の下咽頭がんで治療中と公表しました。昨年亡くなった音楽家の坂本龍一さんは 62 歳の時に中咽頭がんの治療を受けています。咽頭にはどんながんができ、最近の治療はどうなっているか、中咽頭と下咽頭のがんを中心に紹介します。

45 歳の男性 A さんは、食べ物を飲み込むとき、のどに違和感があり、時に唾に血が混じるようになり耳鼻咽喉科を受診しました。内視鏡と CT 検査を受け、扁桃腺（へんとうせん）のところにステージⅡの中咽頭がんが見つかりました。ヒトパピローマウイルス（HPV）のマーカーが陽性で、抗がん剤と放射線治療を同時に受けました（化学放射線療法）。腫瘍は完全に消え、1 年後の現在も再発なく元気です。

咽頭は鼻や口から入った空気や食物が通るところで、鼻の奥から食道の入り口までの腔です。3 つに分けられ、おおむね鼻の奥を上咽頭、口の奥が中咽頭、そこから下の食道までが下咽頭です。

咽頭がんは 60～70 代に多く、とくに男性に多いがんです。できる場所により上咽頭がん、中咽頭がん、下咽頭がんに分けられます。この 3 つのがんは原因や性格がかなり異なります。

中咽頭がんや下咽頭がんの症状は、A さんのように、ものを飲み込んだときの違和感や痛み、痰（たん）や唾に血が混じるなどが最初によくみられます。

リスク因子はアルコールと喫煙です。とくに下咽頭がんと、その前方にできる喉頭がんの原因の多くは酒とたばこです。

これらが原因の咽頭がんではその約 4 割に、同じ咽頭や食道、口腔（こうくう）にがんが重複し複数できます。

酒とたばこで咽頭や食道にがんができやすい状況が作られるからです。

リスクのある患者では、特殊な光を出す「NBI」という内視鏡で、早期のがんが隠れていないか咽頭と食道を詳細に調べます。

早期にがんを発見すれば、内視鏡を用いた手術などで完治できます。この治療では咽頭も喉頭も温存され、声を出す機能は保たれます。

■ HPV が関係する中咽頭がん

中咽頭がんは、下咽頭がんと場所が違うだけでなく、主な原因が違います。酒とたばこは重要なリスクですが、6割以上の中咽頭がんは、女性の子宮頸(けい)がんを引き起こすHPVが関係しています。咽頭がんではHPVの16型が主役です。

HPVが関連する中咽頭がんは、内視鏡などでは発見しにくく、早期にリンパ節に転移をしやすい傾向があります。幸い、Aさんのように放射線治療が良く効きます。

喫煙率と飲酒の減少でこれが原因のがんは減少傾向です。一方でHPVが関係する中咽頭がんが急増しています。

ただ、このタイプのがんは、感染前にHPVワクチンを接種すれば予防は可能です。

がんを完全切除する手術は今でも咽頭がん治療の中心です。しかし咽頭は声を出したり、ものを食べたりするうえで重要で、温存したい器官です。最近では、ロボットを含め経口的な内視鏡手術や化学放射線療法が洗練され、治療成績も上がり、咽頭の機能をできるだけ温存する治療が開発されつつあります。

転移や進行したがんに対しても、免疫チェックポイント阻害薬という免疫療法や、レーザー光を用いてがん細胞を破壊する光免疫療法などの新しい治療もできています。